



vol.1 1999 議事堂前

## MINIMUM/DISTANCE OF PERFORMANCE ART

1999年から2004年にかけて8回行われた、およそ屋外でのやや即興グループパフォーマンス。山岡さ希子の提案でのべ9人のアーティストが参加した。場所はだいたい東京都内。北区の赤羽岩淵水門付近で4回、新宿地下道→国会議事堂前→銀座歩行者天国の3ヶ所というコースものが2回、それから都立小金井公園での1回。パフォーマンスは基本的にすべてだいたい即興だが、山岡と広瀬憲治郎の二人によって行われた1~3回までは、簡単な約束事とルールが決められた中でのパフォーマンスで、事前の打ち合わせもかなりなされた。それでもそれぞれ個人の現場での感覚が別々に反映したと思う。一方それ以降の複数人参加のパフォーマンスでは、事前に一言だけのモチーフになる言葉をそれぞれが知らせあうだけがルールでの、初対面の人もある、かなり完全に近い即興だった。それぞれのアーティストが自主的に選択すべきことは多かったと言える。その中でも、身近なマテリアルをミニマルに使うことと、広い場所で行われるので距離感というのが共通する要素となる。

のべ参加者の名前は以下のとおり。新生呉羽 Shijo Kureha、小川恭平 Ogawa Kyohei、白井廣美 Shirai Hiromi、田上真知子 Tagami Machiko、陳式森 Chen Shishen、のぎすみこ Nogi Sumiko、広瀬憲治郎 Hirose Kenjiro、森出 Mori Izuru、山内宏一郎 Yamauchi Koichiro、山岡佐紀子 Yamaoka Sakiko、小野のん子 Ono Nonko。7回までの全ての回を通して、観客をあえて呼ぶことを特にしなかったので、それらのパフォーマンスは通行人とたまたま来てくれた知人だけが見届けたといえる。

8回は、Between Eco&Ego 2004 というアーティストランのアートイベントの中で行われた。場所は埼玉県川口市の旧リサイクルセンターという旧ゴミ収集所という空き倉庫で、アーティストは4名、たくさんの観客の中で行なった唯一の回である。

# MINIMAM/DISTANCE

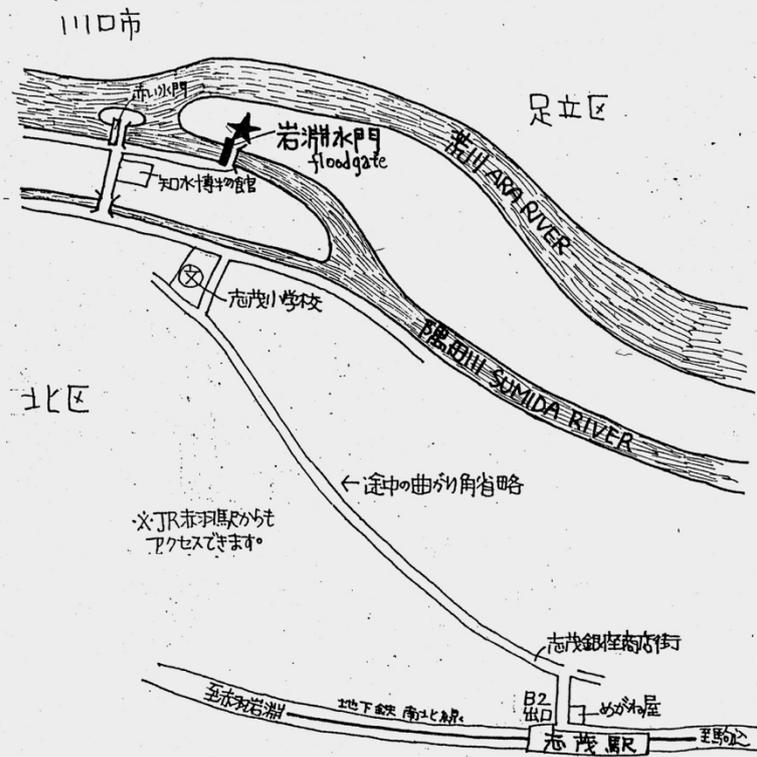
OF PERFORMANCE ART  
vol. 2

山岡佐紀子&広瀬憲治郎

1999. 7. 4. 15:00

東京都北区岩淵水門

地下鉄南北線志茂駅下車約20分



\*雨天中止

問い合わせ

山岡佐紀子 SAKIKO YAMAOKA

TEL/FAX 0492(22)0806



vol.2 1999 岩渕水門 山岡佐紀子、広瀬憲治郎



vol.4 2001 岩渕水門 山岡佐紀子、のぎすみこ

### 半月程前から「即興」は計画される。

まず、各自、モチーフとなるテキスト、あるいは言葉、物の名などを少なくとも1つあるいは小道具1つ以上を2週間前に他の参加者たちに知らせる。つまり、行き当たりばったりではなく、あらかじめあいまいながらも、イメージをもち、当日に望む。そしてそれは崩れる、あるいは保つ、あるいは発展する。その日は、2時間ずっと行う必要はなく、やめて帰ってもいい。開始時の遅刻はなるべく不可。参加はしばらく眺めた後でもいい。観客やカメラの立場に決めこんでもいい。

### 同じ空間に行為を行う他者に出会う。

場にとける、あるいは自分の殻を築く（トートロジーに陥る）のではなく、別々の主語と、別々のベクトルを持つ身体を持つ、あるいはそうした身体である人たちのポリフォニーを実現したい。そうすることで、私たちは私たちの主語と呼ばれるものが実際どこにあり、どんな状態なのか、探ることができるだろう。そのためには、あまり即興すぎるとそれが不明瞭になると思われる。ゆえに各自が計画（モチーフ、もくろみ）もっていることが必要であると考えた。





vol.5 2001 岩淵水門 新生吳羽



vol.6 2001 岩淵水門 山岡佐紀子、白井廣美



vol.7 2003 国会議事堂前 山岡佐紀子



vol.7 2003 銀座 山岡佐紀子、のぎすみこ

## 野外パフォーマンスの観客達による写真展 POLYPHONY (ポリフォニー)

この写真展は、1999年5月から2003年1月にかけて7回行われたMINIMUM / DISTANCE OF PERFORMANCE ART という名の野外パフォーマンスシリーズをモチーフにした写真の展覧会です。

まず、写真展として。

なぜ、写真展をしようと考えたか。

ここでは、芝田文乃さんの言葉が大きく影響しました。彼女は、たくさんのパフォーマンスの写真撮っています。当然ながら私の企画したものに限らず、サウンドライブからシアターまで様々。私の企画したものには、時間が合う限り、撮りに来てくれます。そして、彼女はある日言いました。「私は写真を撮る時、パフォーマンスの記録という意識はあまりない。私が面白いと思う、写真を撮っているのだ。」と。私はうなづきました。

写真はパフォーマンスアートの記録として、どうなのだろうか。間違いなく大切です。でも、それらはパフォーマンスがどんなものだったかをそのまま残したものでないことを私たちは忘れてはいけません。写真はあるシーンの視覚的な一瞬だけ、それもそれを撮った人の角度からだけのものです。時間の進行や人々による気配は写せません。だから、写真によく写っているパフォーマンスがいいパフォーマンスだったとは全く限らない。逆のものも多い。へんな光と角度とへんなトリミングで馬鹿みたいになってしまうこともしばしばです。でも、面白く撮れた写真というのは確実にある。つまり写真は、表現技法を媒介した、造形作品なのです。その上で、記録にもなるものなのだと思えばいい。彼女の言いたかったことなのだと思います。実際、パフォーマンスアートは、写真にとって、独特の興味深いモチーフのひとつです。日常とも少し違う、芝居とも少し違う。意外な発見というものもある。その微妙な感じが伝わる展示になっていけばと思います。

一方、パフォーマンスの記録のために必要な写真ということ考える時、わたしたちパフォーマンスアーティストは、手放しにそれを楽しんでいる場合ではないことは確かです。パフォーマンスアートが、現代の一つの芸術分野として、評価を求めるなら、過去をさかのぼる検証作業というものが必要なのでしょう。しかし、実際はそれは、特に日本では、ほとんどなされてきませんでした。次の上演のチケットを売る為の宣伝活動ではなく、歴史として残すために、どんな写真が、どう取り扱われるべきか。この問を考えるために、この展覧会から何かヒントが生まれれば、と僥越にも思っています。

次に、行われたパフォーマンスについて。

この展覧会のモチーフになっているパフォーマンスシリーズMINIMUM / DISTANCE OF PERFORMANCE ARTは、私、パフォーマンスアーティストの山岡佐紀子が、どうやらアーティストではないらしいが、パフォーマンスを行う行為に関心があると思われる、ある友人を誘う形で始まりました。彼はそれまでいつも、観客の席に座り、しかし並々ならぬ存在感で、行われているパフォーマンスの場の空気を形作る重要な要素を占めている、そういった人だったのです。私はそれまで、パフォーマンスアートの上演が、観客席がアーティストに面白がらせてもらうことを期待し、ステージのアーティストがそれに応えなければならぬという関係で成り立ちがちなこと疑問を持っていました。パフォーマンスアートはそういうことを捨てることから、始まっていたのではなかったか？ だから私は、その人、受け身な観客であることを、きっぱり拒否して私の前に座っていた広瀬憲治郎氏に協力を求め、その問題を解決するための方法を探ろうと思いついたのでした。

ところで、パフォーマンスアートはひとりで行う場合が多いですが、ひとりでスタジオで稽古するような人はあまりいません。もちろん、効果を試す為にテストが必要な場合はそれを行います。稽古をしないのは、パフォーマンスアーティストが、ダンサーや俳優と比べて、怠慢だからではありません。壁や鏡に向かってアクションすることが無意味なのです。パフォーマンスアートは型の美を造形するのではなく、空間に物事を起こすものだからです。しかし、経験を積むことは同じくとても大切です。身体、行為、時間、空間というメディアの感覚の表現力が高まれば、パフォーマンスはより芸術的な品格を増すでしょう。パフォーマンスアートと言えども、アイデア優先の一発芸である時代はとうの昔のことなのです。つまり、そうした感覚を鍛える方法と場ということも私は求めていました。

広瀬さんと私が始めたパフォーマンスのタイトルがMINIMUM / DISTANCE OF PERFORMANCE ART という名前であるわけは次のとおりです。まず、パフォーマンスアートの興味深い特色のひとつである、できるだけminimumな準備で行うこと、そしてパフォーマンスアートの重要な要素である、距離、時間 (distance)をどう取り扱うかを焦点としました。(英語としては、おかしいのかもしれませんが、また、長ったらしくて言いにくいので、近頃はmini/disと略しています。)まずminimumであるために、劇場やギャラリーを借りることはしませんでした。そういった場所というのは、それぞれが持った独特の歴史やしぐみがあって、それと関係を持つ為の手続きを省きたかったのです。そうしたことに使うエネルギーに深い興味が持てなかったのです。また野外、特に「道」を選んだのは、ハプニングのように、通行人にショックを与えたり、場に異化を起こしたいからではありません。distanceということ意識するには、道ほどびったりな場所はないと思われたからです。そして、道にはいろんな条件の道があります。それが面白いと思えました。そして、その選択の結果は厳しくもありましたが、苦労するだけの甲斐はあると思っています。

(山岡佐紀子)

## 各パフォーマンスのあらまし

### 第1回 (Vol.1) 1999年5月9日

場所/新宿中央通り地下道 2:00 ⇨国会議事堂正門前 3:00 ⇨銀座中央通り2丁目 4:00 4:30頃終了

パフォーマー/広瀬憲治郎、山岡佐紀子

\*ふたりともカード式のデジタルメトロノームを用意する。決められた集合場所で、メトロノームのベースの数字をあわせる。互いに背を向けて道の別々の方向にメトロノームのベースで数を数えながら歩きます。100数えあげたところで、メトロノームを止め、踵をかえして、今度は記憶したベースで数えながら、最初の地点に戻る。正確にカウントが行われていれば、再会した場所では、同時に100と声を合わせられるだろう。しかし、人間は必ず、リズムをくわす。そこで、カウントを修正すべく、余ったカウントの分だけ、余した側が、もうひとりの側のほおをひっぱたく。叩く方も叩かれる方も辛い。だから、歩いている間、おいはなんとか数があるように折るであろう。一つの地点でそれを3往復し終わったら、別々に次の地点に移動する。決まった時刻がおとすれたら、予定の場所に立つ。

### 第2回 (Vol.2) 1999年8月1日

場所/赤羽青水門 2:00から約45分

パフォーマー/広瀬憲治郎、山岡佐紀子

\*水門前の橋を渡った先の島の草むらから始める。最初はどちらに主導権があったか定かではないが、それはあまり後の進行に影響はない。どちらかが寝転んでいる時は、もう一人は立っていないなければならない。その交代するきっかけは、寝転んでいるほうが選ぶことができる。交互に寝て、立ってを繰り返しながら、水門前の橋をゆっくり渡る。五体投地に似た進行ではあるが、そこで行われているのは、二人の人間の身体感覚による音楽のようなものだ。また、どのような距離に立つか、どう立ち上がり、どう寝転ぶかという、身体の動かし方の研究のエチュードでもある。橋をわたり終えたところで終了して、そのまま帰る。

### 第3回 (Vol.3) 2000年1月8日

場所/小金井公園 2:00から約1時間

パフォーマー/広瀬憲治郎、山岡佐紀子

\*交互に出す不条理なルール(例えば数字を使わず自分の誕生日を述べよ、など)のもとに、決して失語することなく、話し続ける。言い淀んでしまうと、不条理ルールを考えつかなければ、ならない。良好な世間話など多くの場合意味がなく、むしろ苦痛であることを、表現した。良好であることは、不条理なのではないか。

### 第4回 (Vol.4) 2001年4月15日

場所/赤羽青水門 2:00から2時間

パフォーマー/田上真知子、陳式森、森出、小川恭平、のぎすみこ、新生真羽、山岡佐紀子

\*ワークショップ形式で、同じ空間、同じ場所でそれぞれがそれぞれのモチーフを運用しつつ、他者との関係の即興的かわりを試してみる。それぞれのモチーフ(コンセプト)はそれぞれ、順に「黒の纏タイツ」「(未定/彼はルールを飲み込めていなかった)」「(テキスト長文につき省略)」「ビール」「指」「(テキスト長文につき省略)」「ばんばんパン」他者との関わりを拒みつけた森さんの方法が、みんなからの厳しい問となった。慣れないことで、皆かなり繊細に他者と関わっていたため、頑固な森さんの存在にはなんのためにいっしょにやっているのか?という問になったのだろう。しかしそれもこれも可能性を考える上で大いに役にたった。

### 第5回 (Vol.5) 2001年7月15日

場所/赤羽青水門 2:00から2時間

パフォーマー/のぎすみこ、新生真羽、山岡佐紀子

\*やはり、第4回と同じくワークショップ形式ではあるが、3人とも前回の経験があるので、かなり緊張感と信頼感をもったトライアングルとなった。それぞれのモチーフは順に、「のど」「空の鏡」「亡命/待機」

### 第6回 (Vol.6) 2001年10月14日

場所/赤羽青水門 4:00から1時間30分

パフォーマー/白井廣美、山内宏一郎、新生真羽、山岡佐紀子

\*同じく、モチーフ(コンセプト)を出し合うワークショップ。順に、「こえ」「スカスカ」「存在の夢」「亡命/ダブル」。のぎすみこさんは参加予定であったが、開始時刻を勘違いしたため、他の用事でダブルブッキング。モチーフ提出のみ「亡命/記憶」。真はのぎさんは山岡とのコラボレーションを計画していた。そのため、事前にのぎさんから送られて来たドローイングを山岡は背負って、現れないのぎさんの名前を呼び続け探しまわるパフォーマンスとなった。白井さん、新生さんはそれに呼応するパフォーマンス。遠く離れた草むらで、ひとりの世界を築いていた山内さんもやがて、風景が夕日に包まれるとともに、場所や人に溶け出したようだった。

### 第7回 (Vol.7) 2003年1月4日

場所/新宿中央通り地下道 12:00 ⇨国会議事堂正門前 1:30 ⇨銀座中央通り2丁目 3:00 3:30頃終了

パフォーマー/のぎすみこ、山岡佐紀子

\*モチーフは順に、「羊」「亡命/渡り鳥」。今回は、多くの通行人に対面するため、ワークショップというより、作品としての要素が強い。のぎさんは、よくできたやや気味の悪い羊の着ぐるみの中。山岡は7つの白い箱に折り鶴やら、ビー玉やら、とうがらしやら、くるみやら、スマイルのクリップやら入れてくる。箱はのぎ羊にひとつプレゼントされたが、のぎ羊から山岡に贈られた赤い風船は山岡がすぐに破った。縄跳びをともにしようとしたが、縄や紐やリボンや糸でだんだんがんじがらめになっていく二人。銀座の歩行者天国は、最もパフォーマンスのむづかしい場所として課題となる。気晴らし遊びを求める多くの視線と次元を異にし、芸術としての表現を貫くための明確な態度。昨今の芸術家のおかれた状況を象徴するよう思われた。

野外パフォーマンスの観客達による写真展

Polyphony

2003年2月1日～15日  
於パラゴローグ

写真を撮った人

芝田文乃 (しばたあやの)

日常風景の中からスナップ写真によって驚きと発見を定着する作業を続け、1992年よりはば1年1回のペースで展覧として発表。それと並行して、1990年より演劇の舞台写真、1996年よりパフォーマンス・アートの記録写真、1997年頃からジャズ系ミュージシャンのライブ写真を撮影するようになる。1992年より毎年1-2枚ずつポラードに滞在。ポラード文学の日本語訳も手掛ける。minimum/distance performance art vol.1,4,6,7撮影。

小熊栄 (くまざかえ)

1959年生まれ。1978年大学の建築学科から写真の世界に転身。1988年頃よりコマース・グラフィック・デザイン系のアートインスタレーションの撮影を始める。その後アートの枠が広がらず1998年渡社フリーランスとなる。現在はダンス、パフォーマンス、音楽、建築、美術と多岐にわたる広範でのアートに興味を持ちながら撮影を続ける。minimum/distance performance art vol.2,7撮影。

丸山芳子 (まるやまよしこ)

1982年より発表活動を開始。インスタレーション、動画、プリントなどの作品を制作。生命論という観点から人間という存在、そしてその心理に注目する本質に興味を感じ、表現に取り組んでいる。1997年からルーマニア、ポランド、リトアニア、タイなどでの国際交流展で発表。最近では数々の海外での交流プロジェクトを企画する。おもな作品に『運河の中から』(human Time Circle)、『境界線のはざま』などのシリーズがある。minimum/distance performance art vol.2撮影。

アライ=ヒロユキ

1965年生まれ。現代思想・サブカルチャー・美術批評、共著に『エヴァンゲリオン深層解剖』(大和書房)他に『サブカルチャー批評等の評論を多数執筆。ミニコミ誌『彼方』主宰。5号まで発行。ヨゼフ・ボイスの自由国際大学・日本支部で幅広い現代美術・社会活動を経験。minimum/distance performance art vol.2撮影。

潮来真由美 (いたこまゆみ)

1972年生まれ。わたしは、記録を採るためにカメラを持って参加しました。3名のパフォーマンスは同じ時間と場所にて、それぞれ異なった時空を作り出して見えたように見えました。そして、3名の空気を身体にまよせて走り回っていたわたしの様子も、もしかしら、他者から見ればパフォーマンスに見えたのでは、...と思っただけでした。minimum/distance performance art vol.5撮影。

野木美貴 (のぎみき)

1971年生まれ/貴金属製造  
「撮る」ことによって、パフォーマンスとギャラリーの間という位置にいた。演じるものが身体で表現する喜びや、怒り、悲しみ、それに対し見る者の興味、恐怖、そして傍観に陥る者。あの短い時間と場面に、さまざまな「人間の心情」が凝縮されているように気がした。また繰り返したい! minimum/distance performance art vol.7撮影。

パフォーマンスを行った人

田上真知子 (たがみまちこ)

1971年生まれ。シカゴのThe School of Art Instituteを経てColumbia CollegeのFine Art科を1998年に卒業。その後、東京を拠点にパフォーマンス作品を主に発表しつつ2001年には「パフォーマンスがみたい!」を企画。また同年アトリ工業スペース「out-lounge」を3人のメンバーで東京の大塚に設立する。http://www.tcn-catv.ne.jp/~ska/ minimum/distance performance art vol.4参加。

山内宏一郎 (やまうちこういちろう)

1973年生まれ。グラフィックデザイナー。仕事を通じてパフォーマンスアーティストの山岡佐紀子氏と知り合い、数回に亘り実際のパフォーマンスアートを見る。そこでアーティスト連の行動にショックを受け、体を動かす事を思い出し、最後にフレッシュでやさしい気持ちになる。その後どうしてでもそこから覚悟を見たくなりMinimum/Distance of performance artに参加。当日、他の参加者の体が自由に動いてゆく中、予想通り自分の体は心か頭の抵抗に逆いほどんど動く事はなかったが、それでも自分がじわりじわりとフレッシュでやさしい気持ちへ変化していった事実と感覚は、終わってから随分と過ぎた今でも忘れぬ。http://www.hs.dion.ne.jp/~saiwai/ minimum/distance performance art vol.6参加。

白井廣美(しらひひろみ)

神戸市在住。1992-97年渡米し、カーディフ市に住む。1年間の留学留学の予定であったが、現地にてアーティストになることと発覚する。2000年、アーティスト・アートコーディネーターの中西美穂氏に誘われ、「ウ・マンズパフォーマンスアート大阪」を発足。有志の女性アーティストと共に、2001年、「第1回ウ・マンズパフォーマンスアート大阪」を開催する。このフェスティバルは2年ごとに開催し、10年開催を予定。2002年は神戸にてC.U.E[ミュージシャン3人とダンサー1人からなるユニット]主催の「Live From Far East」シリーズに複数参加し、多彩なミュージシャンやダンサーと即興・コラボレーションを行う。minimum/distance performance art vol.6参加。

新生呉羽 (しんじょうくれは)

1981年の「ジャズミンおとこ」よりソロダンスを修行中。様々なジャンルのアーティストとの共同作業を経て、1996年からは「消えるもの」としてのダンスの特性にこだわる。最近、即興のパフォーマンス「存在の事」を継続している。最近の活動としてはVia, InterAzioni, Avignon, International Artist Meeting in Katowice, Action Art Actuel, Inner Space, Crossing Timeなどの海外のフェスティバル、国内のAAC, MMAAC Festival 1~9に参加。東京都主催コラボレーション「うすば輝く」福島県立美術館主催コラボレーションに参加。2002年からはシリーズ「空に還く」をWENZスタジオと市田節で、Minimum/Distance of Performance Artに参加して思った事はそこで始めて開く問題に対して、的確な選択があるかと思えば、これだけあればといった大前提の音もなく、たいていこれは空や水も地形も私達の方法を一石を投じていると思うことだ。minimum/distance performance art vol.4,5,6参加。

のぎすみこ

1965年生まれ/アーティスト  
この企画に参加すると、日常使わなくてすむ神経・感覚・感情が身体の中に加齢数にあることを思い出させてくれる。それは、単に記憶が蘇った数だけ思い出は無い。わたしの身体から、パフォーマンスという行為を通過して、日常使われるものとして再生されて行く思想だということを知った。「見える」ことに重点を置かずに行われるパフォーマンスが、「見える」事を教える「伝わる」に繋がる。minimum/distance performance art vol.4,5,7参加。

森出 (もりいづる)

毎夕、そのときの気象条件の下、隣町、隣町の街のたたずまいの中で、おどろいています。今、パリで同じことをしたいと思っています。何かいい方法はありませんか? minimum/distance performance art vol.4に参加。

陳式森 (ちえんしーしえん)

アーティスト。2002年、中華人民共和国に帰国。minimum/distance performance art vol.4に参加。

小川恭平 (おがわきょうへい)

minimum/distance performance art vol.4に参加。

広瀬憲治郎 (ひろせけんじろう)

minimum/distance performance art vol.1~3に参加。

山岡佐紀子(やまおかさきこ)

1991年岩手県でパフォーマンスを始める。92年にシンガポールを泳ぐパフォーマンスを経て、93-95年の東京電機プロジェクトで都内28箇所パフォーマンス。後、韓国、ポランド、アイルランド、スロバキア、ドイツなどのパフォーマンスイベントに参加。都内では、2000年に東京芸大芸大美術館で6人のパフォーマンスアーティストを招待する企画を提案、手配。1998年からMinimum/Distance of Performance artという野外でのパフォーマンスイベントを企画を修行中。この企画が今回の写真展のテーマである。全ての回に参加。





<<SLEF-INTRODUCTION BY ARTISTS>>

◆SHINJO KUREHA 新生呉羽  
ダンスの特性にこだわる無音、即興の「存在の夢」を継続している。「存在の夢」は、ただ瞬間の選択をする。四六時中つきまとう抑制や制御が溶解し始め、今答える微妙なあり方のバランスを見つける。「あんなのもありなの か」と選択の勇気を喚起する遊戯のモデル。

◆YAMAOKA SAKIKO 山岡佐紀子  
平面絵画を経て、1991年頃からパフォーマンスアート始める。近代的な時間感覚を超えた場所に興味がある。あまりに刹那的なきらめきに重点が置かれているかのような近年この世界と、それらを統一しようとする退屈で権威的な「力」の出現の、それらの取り引きの危険さに関心を持っている。

◆TAGAMI MACHIKO 田上真知子  
身体をつかった表現を10年ぐらい続けている。まだ言葉になっていない身体が感じる力の認識から、それを近代社会の枠にとらえなおすかという事をテーマに、今回は朝日環境センターの向かいの旧リサイクルセンターの場所性と他のアーティストとの関係性を利用したい。

◆ONO NONKO 小野のん子  
10年間のマイム活動を経て、1998年に表現方法を変える。身体、モノ、空間の新しい関係性に興味あり。今回は旧リサイクルセンターで過去をひきずりつつ、どこまでコミカルな浮遊感をキープできるか・・・重くて軽い年よりの出現。

MINIMUM/DISTANCE OF PERFORMANCE ART とは？

本来相容れない独自の世界を持つ表現者同志が、同空間同時間に別々のコンセプトでパフォーマンスすることで起こる、ぶつかりあい、リンク、バクリ、影響、共振、握手、発見、コントラスト、別れなどのやや即興経験型パフォーマンス。80年代くらいから世界中のアーティストが試みているパフォーマンスやダンスのコラボレーションの方法を取り入れたもの。台東区の谷中墓地で行われていた「谷中会議」を参考に、1998年山岡佐紀子が、広瀬憲治郎を誘って始められ、以来、新生呉羽、田上真知子、のぎすみこら、メンバーを変えながら東京各所でこれまで7回行われてきた。  
<http://www1.odn.ne.jp/~hechima/>

写真(上3枚) 北区岩淵水門 2001 撮影/芝田文乃、(下) Polandにて 2003

# MINIMUM /DISTANCE OF PERFORMANCE ART VOL.8

4人による4つのパフォーマンス Between ECO&EGO パフォーマンス企画「芥-共振ヤード」参加作品

新生呉羽と山岡佐紀子のコラボレーション ゲスト/小野のん子、田上真知子

2004年6月19日(土) 18:00 (当日は丸山常生、ヒグマ春夫、石川雷太らのパフォーマンスもあります)

川口市朝日環境センター 旧リサイクルセンター 川口市朝日 4-21-33

JR川口駅より国際興業バス(川11)または(川13)朝日環境センター下車  
(環境センターは高い建物が目印)



主催: Between ECO&EGO 実行委員会  
<http://www.eo-ego.net>

連絡先 090-3080-4234(金子) 080-3083-1663(山岡)

共催: KAWAGUCHI ART FACTORY

助成: (財)花王芸術・科学財団 (財)UFJ信託文化財団 芸術文化振興基金  
後援: キリシヤ大旅館 川口市 川口市教育委員会 川口市商工会議所





vol.8 2004 川口旧リサイクルセンター 新生呉羽、山岡佐紀子

Between Eco&Ego という川口市内の様々な場所を活用したアートイベントに参加した。この場合は、観客がたくさん来ていて、パフォーマーと観客は混じり合っていた。パフォーマンスを行ったのは、山岡の他、新生呉羽、田上真知子、小野のん子。即興ではあるが、裏テーマとして「恋愛」「捨ててきた男たち」というのがあり、4人のアーティストの過去に関わりのあった男たちの姿と別れた理由を映すスライド上映もあった。小道具は全て会場にあった備品を使った。



小野のん子、山岡佐紀子